

解説と解答例

1. 第一問

本問では、著者らがどのような説を批判しているかを読み取り、それぞれの説の主張とそれに対する批判を簡潔にまとめる力が求められています。まとめ方は一様ではありませんが、与えられた字数内でバランスよくまとめる能力が試されています。

<解答例>

筆者らは、地理説、文化説及び無知説を批判している。

地理説は、富の格差は地理的な違い、特に温帯地域が熱帯地域よりも相対的に有利であることから生じると主張する。この説の古典的な論拠は、熱帯気候の人々が怠惰で探究心に欠け、暴君に支配されやすいというモンテスキューの見解である。現代版では、マラリアなどの熱帯病が労働生産性を低下させることや、熱帯の土壌が痩せており、生産性の高い農業ができないことが重視される。しかし、かつてのアステカやインカの大文明の例に見られるように、熱帯は貧困という歴史的事実は明白でない。また、病気や低い農業生産性の主因は、貧困と公衆衛生対策をとれない政府にある。

文化説は、繁栄が特定の宗教や、国民の信念、倫理又は価値観に結びついており、プロテスタントの倫理が西欧における近代的工業社会の隆盛を促す重要な役割を演じたなどと主張する。しかし、カトリックのフランスやイタリア、キリスト教と無関係な東アジアの国々も繁栄しており、特定の宗教と経済的成功の特別な関係は存在しない。また、朝鮮半島が分断された後の北朝鮮と韓国との財運の乖離は、国境を境に異なる政治体制と制度が課された結果であり、文化的な相違は繁栄の違いの原因ではなく帰結である。

無知説は、不平等が存在するのは、統治者や政策立案者が貧困を克服する方法を知らないからだという考え方である。しかし、無知は世界の貧困のごく一部しか説明できない。貧しい国の指導者は、政策の経済的帰結を誤解しているために悲惨な政策をとるのではなく、プシア首相の事例が示すように、権力維持のために政治的に有利な政策を採用しているにすぎないことがあるからである。(699文字)

2. 第二問

本問では、筆者の見解を主に第一章から読み取って説明した上で、自身の考えを述べる必要があります。したがって、この問題は、基本的な読解力に加え、思考力と表現力を測るものです。受験者の考えについては、唯一の正解は存在しませんが、思考

の論理性と明晰な表現が求められています。

<解答例>

著者は、経済的・政治的制度が国々の繁栄を決定する根本的な要因であり、特に、経済制度は政治制度によって決定されると主張する。たとえば、国の政治制度のもとで、政治的プロセスがいかに関わるかが決まり、政治家のふるまい方が左右される。それにより、経済成長を促す経済政策が採用されるかどうかが決まり、経済制度のもとで、企業や個人への経済的インセンティブが形づくられるとする。

私の考えとしては、地理説や文化説は、2つのノガレスの例のような反証事例が多く、明らかに的を射ていない。無知説と筆者の見解は、繁栄が経済制度に起因するという点において共通しており、この点は自明に思われる。ただ、望ましい経済制度が何かについては、課題文では必ずしも明らかにされていない。

無知説は、リーダーの無知がなければより良い経済政策が実施されると考える点で単純すぎるように思われるが、一方で、国の経済制度を決定するのは政治制度であるとの課題文の主張も実証されてはいないように思われる。天然資源の有無など、富が生み出される原因は複雑であり複合的でありうる。その探求は永遠の課題であろう。近年の米国では、ゲイツの成功を可能にした「安定性と継続性」が時の政権によって揺らぐことが示唆される。政治制度はたしかに政治家のふるまい方を決めるが、政治家が政治制度を変えることもある。繁栄と経済制度と政治制度のつながりは一筋縄ではないように思われる。また、課題文は、望ましい経済制度を導く政治制度がどのように形成されるかについては明らかにしていないため、この点についてもさらなる探求が必要であると考え。(675字)